

ダークトライアドは他者を嫌い、 他者から嫌われることを避けようとするのか？

Do Dark Triad Personalities Dislike Others More, or Try to Avoid
Being Disliked by Others?

河野和明*, 羽成隆司**, 伊藤君男*

Kazuaki KAWANO, Takashi HANARI, Kimio ITO

キーワード：ダークトライアド, 対人嫌悪傾向, 被嫌悪回避

Key words : dark triad, tendency to dislike others, avoidance of being disliked by others

要約

ダークトライアドの3種のパーソナリティであるマキャベリアニズム, 自己愛傾向, サイコパシー傾向が対人嫌悪および被嫌悪回避とどのように関係するかを明らかにするために, 20歳から69歳までの社会人にWeb調査を実施した。相関分析の結果, マキャベリアニズムは男女とも対人嫌悪傾向尺度および被嫌悪回避尺度と正の有意な相関をもち, 嫌悪対象人物に対してネガティブ感情が高く, 嫌悪的な認知も一貫して高かった。自己愛傾向は男女とも対人嫌悪傾向尺度との間に有意な負の相関を示し, 嫌悪対象人物へのポジティブ感情が高かった。被嫌悪回避尺度との間には男性のみ有意な正の相関を示した。サイコパシー傾向は, 男性において被嫌悪回避尺度と有意な正の相関が, 女性では対人嫌悪傾向と有意な正の相関が示され, 嫌悪対象人物へのポジティブ感情が高かった。全体的に, マキャベリアニズムが高いと対人嫌悪および被嫌悪回避が高く, 嫌悪対象人物に対するネガティブな認知と感情が高いことが示された。ダークトライアド特性と対人感情について考察された。

Abstract

This study aimed to investigate correlations of the Dark Triad—Machiavellianism, narcissistic tendencies, and psychopathic tendencies—, and interpersonal dislike tendency and avoidance of being disliked (ABD). A Web-based survey was conducted among adults aged 20 to 69. Correlation analysis revealed that Machiavellianism in both sexes had positive significant

correlation to the interpersonal dislike tendency scale and the ABD scale, and that negative feelings and cognitions toward the recalled target person of dislike were consistently higher. Narcissistic tendencies showed a significant negative correlation with the interpersonal dislike tendency scale for both sexes, and positive feelings toward the target of dislike were high. Only males showed a significant positive correlation with the ABD. Psychopathic tendencies were positively correlated with ABD in males, and significantly positively correlated with interpersonal dislike in females, who showed more positive feelings toward the target of dislike. Overall, Machiavellianism was positively associated with higher interpersonal dislike tendency and ABD, and higher negative cognitions and feelings toward the target disliked person. Dark triad characteristics and interpersonal emotions were discussed.

問題

進化心理学的な見地から、対人的な好悪感情は互恵的利他性の感情的基盤とされる (Trivers, 1971)。一般に人は、相手に対する好悪感情に応じて協力的になるか否かを切り替えている。また、他者を裏切る相手は嫌われて、避けられる。これらが、人間関係の背景として作用することによって、互いの協力が促され、互恵的利他性が強化されていると考えられる。

先行研究で示された、嫌いな他者 (斎藤, 2003) や苦手な他者 (日向野・堀毛・小口, 1998; 日向野, 2008 など) に共通する特徴は、相手の自己中心性、傲慢さ、偉そうな態度、相手への妬み、相手の魅力などである。これらは、自己の社会的立場や利益が直接的・間接的に相手から浸食される状態において対人嫌悪が生じることを示唆する。人は自己の社会的立場と利益についてきわめて鋭敏であり、それらが損なわれる可能性を未然に回避するべく対人嫌悪を発動していると考えられる。

一方、こういった嫌われる人の特徴は常識的に明白である。すなわち、人はどうしたら他者から嫌われるか知悉している。加えて人は、他者から嫌われると多くの場合、自己利益の逸失につながることを知っている。嫌われれば社会的資源の一部を失うし、評判 (reputation; Fehr, 2004) を下げることもつながり、関係性攻撃 (Crick & Grotpeter, 1995) を含む直接間接の攻撃対象となる可能性も高まる。したがって、そういった事態を防ぐためにも、人は通常、他者からの嫌悪をある程度避けるよう行動する傾向をもつだろう。一方、こういった利害に関するいわば高次の認知を別にしても、自分に対する嫌悪感を他者からあからさまに表明されることは、通常、多くの人にとって不快である。したがって逆に、状況にも依存するものの、他者への嫌悪感のあからさまな表明はその他者に対する攻撃として作用しうる。

このようなことから、基本的には、人は極端に他者から嫌われないように動機づけられていると考えられる。他者から嫌われないように努めれば、人は、前述の嫌われる人の特徴と逆の振る舞いをするようになる。すなわち、他者の利益を尊重し、価値観や態度を相手にあわせ、コミュニケーションを円滑化しようと努力するように方向づけられるだろう。ある集団内のほとんどの成員にこういった方向づけがなされれば、結果的に、他者から嫌われることを避ける心理行動傾向は集団内の互恵的利他性を強化すると考えられる。そして実際、この傾向は利他的行動と正の相関をもっていた（河野・羽成・伊藤，2016）。

一方、互恵的利他性の維持に対して障害となりうる性格特性に、ダークトライアド（Dark Triad）がある（概説は、下司・小塩，2020；増井・浦，2018）。これは、社会関係の中で、反社会的または有害で、「嫌われやすい」（socially aversive）とされる3種の性格特性であり、マキャベリアニズム（Machiavellianism）、自己愛（narcissism）傾向、サイコパシー（psychopathy）傾向から成る。マキャベリアニズムは、他者を操作しようとする意図、目的のためには手段を選ばない傾向、冷酷で計算高い行動を取る、といった特徴をもつ人格像である。自己愛傾向は、過大な自己評価、強い承認欲求と賞賛を求める傾向、自己の重要性への過度な関心といった特徴をもつ。サイコパシーは元来、冷酷性、希薄な感情、利己性、無責任、衝動性、表面的魅力などを有する人格特性である（Cleckley, 1976）が、健常範囲におけるサイコパシー傾向者は、他者への感情的な共感の乏しさ、衝動的で高リスク行動を取る傾向、罪悪感や後悔の乏しさ、法や社会規範の軽視、といった特徴をもつ個人として特徴づけられる。

これら3特性に共通する特徴として、他者に対する共感性の低さ、社会に被害を与える傾向（Paulhus & Williams, 2002）、冷淡さと他者操作性（Jones & Figueredo, 2013）が指摘されている。その一方で、時間的志向性および同一性希求の点で、3特性が区別されることも主張されている（Jones & Paulhus, 2010）。すなわち、マキャベリアンは長期的に現実的利益をもとめるが、自己愛傾向者は短期的かつ誇大な自己という理想を求める。これに対して、サイコパシー傾向者は、短期的かつ現実的利益を求めるとされる。なお、進化心理学的な立場から、ダークトライアドはその対人方略が搾取的であることを前提として、生活史戦略（life history strategy）との関連や配偶行動の点から検討が進んでいる（Jonason, et al., 2009 など）。

ダークトライアド特性の主要な特徴は、前述の嫌われる人の特徴と多くが重複するものであるから、人は嫌悪感を基盤として彼らを排除する傾向をもつといえる。逆にダークトライアド特性をもつ者にとっては、他者の多くが自分を排除すべく嫌悪感情を生起させやすいと考えられるので、その中であって排除に対応するための何らかの対人方略をそなえるようになるだろう。そのため、他者から嫌われることに対して、ダークトライアド特性に応じた特徴を示すことが予想される。一方、ダークトライアド傾向者自体のもつ全般的な対人嫌悪の強さ、さらに他者のどのような側面に嫌悪を感じやすいかといった点には、同様に各々のダークトライアドの特性が反映さ

れる可能性がある。

以上の前提に立つと、ダークトライアド傾向者は対人嫌悪および他者から嫌われることについてその特性を反映した特徴をもっている可能性が考えられる。そこで本研究では、幅広い年代の一般的な社会人を対象として、想起した嫌悪対象人物に対する感情および嫌悪の評価を測定し、さらに全般的な対人嫌悪のモチやすさ、嫌われることを自覚的に避けようとしている程度（被嫌悪回避）について Web 調査を用いて検討を試みた。結果の分析では、ダークトライアド3特性それぞれは、(1) 対人嫌悪が高いか、(2) 他者から嫌われることを避ける傾向が強いか、(3) 具体的な嫌悪対象人物に対する嫌悪的な評定にどのような特徴が見られるか、をそれぞれ明らかにする。なおその際には、対人嫌悪傾向尺度と被嫌悪回避尺度について、比較可能な結果については先行研究と比較しつつ、尺度特性についても副次的に検討する。

方法

調査参加者

インターネット調査会社（マクロミル社）の登録者から回答者を募集した。対象者から20～60代の各年代（20 - 29歳、30 - 39歳、40 - 49歳、50 - 59歳、60 - 69歳）に、男性83名、女性83名ずつが割り当てられ、計830名（男性415名、女性415名）の回答が収集された。ここから、職業カテゴリで「学生」を選択した回答者を除外し、808名（男性405名、女性403名）が分析の対象となった。回答者の平均年齢は45.24歳（ $SD = 13.53$ ）であった。

調査内容

まず、参加者に「現在の職場や学校、地域等の人間関係の中で、あなたが最も嫌いな人、好きでない人」の想起を求め、その人物の性別、年齢の入力を求めた。その後、この人物について以下の測定を実施した。

対象人物に対する感情：対人関係における典型的な肯定的感情として「尊敬」「愛情」を、同じく否定的な感情として「恐怖」「軽蔑」「嫌悪」「怒り」を選定し、想起した対象人物に対する各感情について7件法（1 = まったく感じない～7 = 非常に感じる）による評定を求めた。

対人的嫌悪尺度：対象人物の嫌悪的な特徴に対する評価を測定するために、斎藤（2003）が開発した対人的嫌悪尺度を投入した。この尺度は、嫌いな他者の特徴を8種（「自分との相違による嫌悪」「相手への妬みによる嫌悪」「相手の傲慢さによる嫌悪」「相手の自己中心性による嫌悪」「相手の主張過剰による嫌悪」「自分との類似による嫌悪」「相手の外見による嫌悪」「相手の話し方による嫌悪」）の下位尺度から測定するものである。それぞれの下位尺度は、9項目、8項目、8項目

目、12項目、6項目、4項目、3項目、3項目から構成されていたが、本研究では回答時の負担を考慮し、各下位尺度の因子負荷量の大きい項目から5項目を採用した（構成項目数が5未満の「自分との類似による嫌悪」「相手の外見による嫌悪」「相手の話し方による嫌悪」の各下位尺度のみ全項目を採用）。各項目について6件法（1＝まったくそう思わない・まったくあてはまらない～6＝まったくそう思う・まったくあてはまる）で評定を求めた。また、個人特性を測定する目的で以下の尺度を投入した。

対人嫌悪傾向尺度：本尺度（高瀬・河野，2023）は対人嫌悪のもちやすさを測定するものであり、8項目で構成されている（5件法：1＝まったくあてはまらない～5＝非常にあてはまる）。高得点ほど対人嫌悪をもちやすいことを示している。

被嫌悪回避尺度：他者から嫌われることを避けようとする傾向を測定するために、河野・羽成・伊藤（2014）の被嫌悪回避尺度を投入した。全10項目に対して5件法（1＝まったくあてはまらない～5＝まったくあてはまる）によって評定を求めた。

日本語版 Short Dark Triad (SD3-J)：ダークトライアド傾向を測定する目的で、下司・小塩（2017）の日本語版 Short Dark Triad（以下、SD3-J）を投入した。マキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向のそれぞれについて9項目5件法（1＝まったくそう思わない～5＝非常にそう思う）で評定を求めた。

ビッグファイブ性格特性（日本語版 Ten Item Personality Inventory; TIP-J）：後述の重回帰分析において一般的な性格特性の影響を調整するために、日本語版 Ten Item Personality Inventory（小塩・阿部・カトロニ，2012）を投入した。これは、パーソナリティ特性のいわゆる Big Five を少ない項目によって簡便に測定するために開発された項目群である。外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性のそれぞれについて2項目7件法（1＝全く違うと思う～7＝強くそう思う）で評定を求めた。

倫理的配慮

本研究は東海学園大学研究倫理委員会の承認を得た（受付番号 2023-19）。調査協力者は研究参加および結果の公表について同意の上で自発的に調査に参加していた。

結果

嫌悪対象人物の特徴

回答者の性ごとに嫌悪対象人物の性別人数を算出した。嫌悪対象人物として、男性回答者の324名（80.0%）は男性を挙げ、81名（20.0%）が女性を挙げた。この度数の偏りは有意であった

($\chi^2 = 145.8$, $df = 1$, $p < .001$)。同様に、女性回答者の99名(24.6%)は男性を挙げ、304名(75.4%)が女性を挙げた。この度数の偏りは有意であった($\chi^2 = 104.3$, $df = 1$, $p < .001$)。男女の割合の差は有意ではなかった(2つの比率の比較検定による; $N1 = 405$, $N2 = 403$, $p = .12$)。男女とも、異性より同性を嫌悪する特徴があったと言える。大学生を対象とした先行研究(日向野, 2007; 河野・羽成・伊藤, 2017)でも、男女とも同性嫌悪が見られ、河野・羽成・伊藤(2017)では同性を挙げた割合は男性の方が多かった。

なお、対象者との身体的接触を避ける程度(接触回避)について性差を検討した研究(Kawano, Hanari, & Ito, 2011; 河野・羽成・伊藤, 2015b; 羽成・河野・伊藤, 2022)では、大学生において、女性はほぼ一貫して男性に対する高い回避と女性に対する低い回避を示すことが明らかになっている。したがって、本研究で扱う一般的な対人嫌悪とは様相が異なっている。ただし、接触回避については、特定の嫌悪対象人物で検討したものではないので、その点についての確認が必要である。

嫌悪対象人物の推定年齢について記載のあった回答に基づき、年齢の平均値を算出した。男性回答者における嫌悪対象人物男性の推定年齢は平均47.68歳($SD = 14.14$)であり、嫌悪対象人物女性の推定年齢は平均53.98歳($SD = 14.57$)だった。一方、女性回答者における嫌悪対象人物男性の推定年齢は平均48.35歳($SD = 14.02$)であり、嫌悪対象人物女性の推定年齢は平均48.58歳($SD = 16.02$)だった。回答者の性ごとに嫌悪対象人物男女の推定年齢の平均値について t 検定を行った結果、男性回答者において有意な差が認められたが($t(235) = -2.698$, $p < .01$, Cohen's $d = -0.443$)、女性回答者において有意な差は認められなかった($t(212) = -0.076$, ns , Cohen's $d = -0.014$)。また、回答者の年齢と嫌悪対象人物の推定年齢との差を算出したところ、男性回答者における嫌悪対象人物男性との年齢差は平均2.37歳($SD = 10.93$)であり、嫌悪対象人物女性との年齢差は平均4.94歳($SD = 18.67$)だった。一方、女性回答者における嫌悪対象人物男性との年齢差は平均6.41歳($SD = 14.23$)であり、嫌悪対象人物女性との年齢差は平均2.59歳($SD = 11.51$)だった。いずれも嫌悪対象人物は平均すると回答者本人よりも年上だったが、嫌悪対象人物男性との年齢差($t(58.42) = -1.805$, ns , Cohen's $d = -0.348$)および嫌悪対象人物女性との年齢差($t(37.86) = 0.708$, ns , Cohen's $d = 0.182$)には、いずれも回答者の有意な性差は見られなかった。

対人嫌悪傾向尺度および被嫌悪回避尺度の信頼性

対人嫌悪傾向尺度(高瀬・河野, 2023)は幅広い年代のサンプルを対象として開発されたのに対し、被嫌悪回避尺度(河野・羽成・伊藤, 2014)は当初大学生を対象として開発された。開発時点のサンプルにおいて、それぞれ尺度としての一定の信頼性が確認されているが、両尺度について、今回の社会人サンプルにおいて信頼性を再確認した。まず、それぞれの尺度項目に対して

因子分析（最尤法）を実施したところ、高い一因子性が確認された（第一因子による説明率は対人嫌悪傾向尺度で60.9%、被嫌悪回避尺度で59.1%）。続いて、アルファ係数を算出したところ、高い一貫性が認められた（対人嫌悪傾向尺度 $\alpha = .91$ 、被嫌悪回避尺度 $\alpha = .92$ ）。したがって、本調査の社会人サンプルにおいてもこれらの尺度は一定の信頼性が確認されたと言える。

主要変数の性差

次に、主要な変数について、回答者の性ごとの平均値および検定結果を示す（Table 1）。対人嫌悪傾向尺度および被嫌悪回避尺度には性差が見られ、いずれも女性が男性より高かった。ダークトライアドについては、マキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向のすべてにおいて男性が高かった。嫌悪対象人物に対する感情はいずれも性差が見られなかった。一方、対人的嫌悪尺度の下位尺度については、「自分との相違による嫌悪」と「相手の主張過剰による嫌悪」は女性が高かったが、「自分との類似による嫌悪」は男性が高かった。

Table 1 対人嫌悪傾向尺度、被嫌悪回避尺度、ダークトライアドの3特性、嫌悪対象人物に対する6種の感情および対人的嫌悪尺度の8下位尺度の性別平均値とt検定の結果：（ ）は標準偏差

	男性	女性	df	t	p	Cohen's d
対人嫌悪傾向尺度	29.39(6.71)	30.63(6.23)	806.0	-2.718	.007	-0.191
被嫌悪回避尺度	31.42(8.16)	34.23(7.85)	806.0	-4.982	.000	-0.351
マキャベリアニズム	28.93(5.20)	28.03(5.60)	806.0	2.369	.018	0.167
自己愛傾向	22.93(6.10)	19.65(6.27)	806.0	7.544	.000	0.531
サイコパシー傾向	23.85(5.12)	20.39(5.39)	806.0	9.356	.000	0.658
尊敬	2.60(1.69)	2.46(1.57)	802.4	1.248	.212	0.088
愛情	2.26(1.53)	2.20(1.42)	806.0	0.536	.592	0.038
恐怖	3.34(1.81)	3.55(1.84)	806.0	-1.635	.103	-0.115
軽蔑	4.47(1.75)	4.41(1.72)	806.0	0.469	.639	0.033
嫌悪	4.98(1.70)	5.13(1.50)	794.5	-1.383	.167	-0.097
怒り	4.54(1.73)	4.58(1.63)	806.0	-0.316	.752	-0.022
自分との相違による嫌悪	21.12(5.59)	22.31(5.07)	799.3	-3.160	.002	-0.222
相手への妬みによる嫌悪	13.53(5.27)	13.08(4.90)	806.0	1.268	.205	0.089
相手の傲慢さによる嫌悪	19.84(6.47)	20.19(6.19)	806.0	-0.783	.434	-0.055
相手の自己中心性による嫌悪	20.28(6.12)	20.41(6.08)	806.0	-0.287	.774	-0.020
相手の主張過剰による嫌悪	17.92(5.34)	19.15(5.41)	806.0	-3.236	.001	-0.228
自分との類似による嫌悪	9.52(4.25)	8.35(3.76)	795.4	4.158	.000	0.292
相手の外見による嫌悪	9.83(3.78)	10.18(3.98)	806.0	-1.287	.198	-0.091
相手の話し方による嫌悪	11.84(3.73)	11.74(3.74)	806.0	0.380	.704	0.027

変数間の相関

続いて、主要な変数間の相関を Table 2 に示す。対人嫌悪傾向尺度と被嫌悪回避尺度の間には男女とも有意な正の相関が認められた。対人嫌悪傾向は男女とも、「相手への妬みによる嫌悪」と「自分との類似による嫌悪」を除いてすべての対人的嫌悪尺度の下位尺度と有意な正の相関が見

られた。一方、被嫌悪回避は男性においてすべての対人的嫌悪尺度の下位尺度と有意な正の相関が見られた。女性においては、「相手への妬みによる嫌悪」「相手の主張過剰による嫌悪」「相手の話し方による嫌悪」とのみ有意な正の相関が見られた。

マキャベリアニズムは男女とも対人嫌悪傾向尺度と正の、被嫌悪回避尺度と正の有意な相関をもっていた。マキャベリアニズムが高いと、他者を嫌うことと他者から嫌われることを避ける傾向とがともに高いと言える。自己愛傾向は、男女とも対人嫌悪傾向尺度との間に有意な負の相関を示したが、被嫌悪回避尺度との間には男性のみ有意な正の相関を示した。自己愛傾向が高いと男女とも他者を嫌わない傾向がわずかにあり、男性のみ他者から嫌われることを避ける傾向がわずかにあることが示唆された。サイコパシー傾向は、男性において対人嫌悪傾向尺度と有意な相関は示されず、被嫌悪回避尺度とのみ正の相関が示された。一方、女性では逆に、対人嫌悪傾向と有意な正の相関が示され、被嫌悪回避尺度とは有意な相関が示されなかった。男性のサイコパシー傾向者は嫌われることを避ける傾向がわずかにあり、女性は他者を嫌う傾向がわずかにあることが示唆された。ただし、自己愛傾向およびサイコパシー傾向とこれら2尺度との相関は小さいので、比較的明瞭な結果が得られたのは、マキャベリアニズムと対人嫌悪傾向尺度および被嫌悪回避尺度との相関であると言える。

嫌悪対象人物に対する感情については、マキャベリアニズムは男女とも、ポジティブ感情である尊敬・愛情とは無相関であり、ネガティブ感情の恐怖・軽蔑・嫌悪・怒りとは有意な正の相関が見られた。これに対して、自己愛傾向は男女とも、尊敬・愛情と有意な正の相関、嫌悪と有意な負の相関を示し、男性においてのみ軽蔑と有意な負の相関があった。恐怖と怒りとは無相関だった。サイコパシー傾向は、男女とも尊敬・愛情と有意な正の相関が見られたことは自己愛傾向と同様であったが、男女とも恐怖と正の相関が見られ、女性のみ軽蔑と怒りと有意な正の相関を示した。全体的に、マキャベリアニズムは嫌悪対象人物に対する高いネガティブ感情と関連しているが、自己愛傾向とサイコパシー傾向はポジティブ感情と関連していることが示された。

さらに、嫌悪対象人物に対する対人的嫌悪尺度による8種の側面との相関を見ると、マキャベリアニズムは男女とも8種すべての嫌悪と有意な正の相関があった。これに対して、自己愛傾向は男女とも「自分との相違による嫌悪」と有意な負の相関、「相手への妬みによる嫌悪」および「自分との類似による嫌悪」と有意な正の相関が見られた。サイコパシー傾向は、「相手への妬みによる嫌悪」「自分との類似による嫌悪」「相手の外見による嫌悪」と有意な正の相関が見られた。ここでも、全体的にマキャベリアニズムは、自己愛傾向とサイコパシー傾向よりも対象人物に関するさまざまな嫌悪的認知が高いことが示唆された。

なお、「自分との類似による嫌悪」はダークトライアド3種とも男女で有意な正の相関を示しているが、自己愛傾向とサイコパシー傾向はマキャベリアニズムよりもすべて有意に相関が大きかった(相関係数の有意差検定)。この差も、マキャベリアニズムとその他の2特性との特徴の違

いを反映するものと思われる。

Table 2 主要変数間の相関係数

変数	被嫌悪回避尺度	マキャベリアニズム	自己愛傾向	サイコパシー傾向	尊敬	愛情	恐怖	軽蔑	嫌悪	怒り	自分との相違による嫌悪	相手への妬みによる嫌悪	相手の傲慢さによる嫌悪	相手の自己中心性による嫌悪	相手の主張過剰による嫌悪	自分との類似による嫌悪	相手の外見による嫌悪	相手の話し方による嫌悪
1. 対人嫌悪傾向尺度	.25**	.33**	-.13**	.06	-.27**	-.21**	.19**	.48**	.56**	.48**	.57**	-.05	.46**	.55**	.28**	-.14**	.38**	.54**
	.22**	.27**	-.14**	.10*	-.28**	-.31**	.05	.35**	.46**	.38**	.52**	-.16**	.36**	.41**	.26**	-.13**	.35**	.40**
2. 被嫌悪回避尺度		.39**	.12*	.12*	.09	.11*	.27**	.16**	.14**	.19**	.14**	.22**	.19**	.16**	.22**	.14**	.11*	.17**
		.31**	-.02	-.05	.04	-.01	.19**	.04	.08	.05	.08	.11*	.09	.03	.22**	.02	.07	.10*
3. マキャベリアニズム			.24**	.32**	.05	.06	.17**	.12*	.17**	.17**	.23**	.14**	.22**	.24**	.13**	.11*	.20**	.18**
			.27**	.35**	.05	.03	.12*	.16**	.12*	.15**	.19**	.12*	.15**	.21**	.23**	.11*	.14**	.13**
4. 自己愛傾向				.62**	.19**	.28**	.02	-.11*	-.12*	-.04	-.16**	.28**	.01	.01	.03	.35**	.15**	.01
				.60**	.15**	.21**	.02	.06	-.11*	.04	-.14**	.15**	-.06	.00	-.04	.27**	.03	-.02
5. サイコパシー傾向					.19**	.25**	.14**	.09	.09	-.09	.28**	.08	.07	.07	.07	.27**	.23**	.07
					.18**	.20**	.12*	.11*	-.02	.11*	-.09	.21**	.04	.07	.07	.37**	.15**	.05

ダークトライアドおよびビッグファイブ性格特性による対人嫌悪傾向と被嫌悪回避の予測

ダークトライアド3種が対人嫌悪傾向および被嫌悪回避に対して、それぞれが独自にどの程度関係するかを検討するために、対人嫌悪傾向尺度および被嫌悪回避尺度を従属変数として重回帰分析を試みた。説明変数には、ダークトライアド3種に加えて、一般的な性格特性であるビッグファイブを採用し、マキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向、外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性の8変数を取り上げた (Table 3)。単相関では自己愛傾向およびサイ

Table 3 ダークトライアド3種とビッグファイブ性格特性を説明変数として、対人嫌悪傾向尺度(上)および被嫌悪回避尺度(下)を従属変数とした重回帰分析の結果 (強制投入法)

	対人嫌悪傾向尺度		
	β	t	p
マキャベリアニズム	.303	8.609	.000
自己愛傾向	-.329	-6.655	.000
サイコパシー傾向	.163	3.361	.001
外向性	.000	-0.010	.992
協調性	.043	1.147	.252
勤勉性	.087	2.352	.019
神経症傾向	.180	4.904	.000
開放性	.038	0.951	.342
	被嫌悪回避尺度		
	β	t	p
マキャベリアニズム	.317	9.511	.000
自己愛傾向	.203	4.330	.000
サイコパシー傾向	-.131	-2.841	.005
外向性	-.042	-1.180	.238
協調性	.187	5.231	.000
勤勉性	-.009	-0.261	.794
神経症傾向	.325	9.337	.000
開放性	-.149	-3.937	.000

コパシー傾向において有意差の有無に性差が見られたが、ここでは、全体的な傾向を把握するために男女込みのデータによって分析した。対人嫌悪傾向 ($F(8,799) = 21.69, p < .001, R^2 = .178$) および被嫌悪回避 ($F(8,799) = 35.60, p < .001, R^2 = .263$) の各モデルは有意であった。すべてのモデルにおいて VIF が 10 を超える説明変数はなく、多重共線性の問題は確認されなかった。

対人嫌悪傾向を有意に予測したのは、マキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向、勤勉性、神経症傾向であった。このモデルにおいては、マキャベリアニズムとサイコパシー傾向はいずれも対人嫌悪傾向の高さと、自己愛傾向は低さと関連していた。一般的な性格特性では、勤勉性の高さと神経症傾向の高さが、高い対人嫌悪傾向と関係していた。

一方、被嫌悪回避を有意に予測したのは、マキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向、協調性、神経症傾向、開放性であった。マキャベリアニズムおよび自己愛傾向が高いほど被嫌悪回避が高いが、サイコパシー傾向は被嫌悪回避の低さと関係していた。性格特性では、協調的であるほど、神経症傾向が高いほど、開放性が低いほど、被嫌悪回避が高かった。このモデルにおいては、マキャベリアニズムと自己愛傾向はいずれも被嫌悪回避を高めるように作用していたが、サイコパシー傾向は被嫌悪回避を低めるように作用していた。

このように、男女込みのモデルにおいて、マキャベリアニズムが高いと対人嫌悪傾向と被嫌悪回避の両者とも高まった。一方、自己愛傾向が高いと対人嫌悪傾向は低下し、被嫌悪回避は高まった。さらに、サイコパシー傾向が高いと、自己愛傾向とは逆に、対人嫌悪傾向が高まり被嫌悪回避は低下した。このモデルの範囲では対人嫌悪傾向と被嫌悪回避との関係がダークトライアド3種間でそれぞれ異なることが示された。

また、性格特性については、予想されるように神経症傾向が対人嫌悪傾向と被嫌悪回避の両者に影響していた。勤勉性の高さが対人嫌悪傾向と若干の関係を示したことは、勤勉性が高いと他者に対してやや不寛容であることを示唆する。他者との葛藤を避けようとする特性である協調性が被嫌悪回避の高さと関連していることは整合的である。開放性の高さが低い被嫌悪回避と関連することについては、開放性の高い個人が他者の意向よりも自己の個性や独自性を重んじることを反映しているものと考えられる。

考察

本研究では、幅広い年代の一般社会人を対象に、ダークトライアドの3種の特性が一般的な対人嫌悪傾向および被嫌悪回避とどのように関連するか、また、嫌悪対象者に対する評定にどのような特徴が見られるかを検討した。これにより、問題で掲げた3点について以下のように結論づけられる。すなわち、(1) マキャベリアニズムは対人嫌悪傾向の高さと明瞭に関係するが、自己

愛傾向は対人嫌悪傾向の低さと関連する。一方、サイコパシー傾向は対人嫌悪傾向との関連が性によって異なる可能性がある。(2)マキャベリアニズムは被嫌悪回避の高さと明瞭に関連するが、一方、自己愛傾向とサイコパシー傾向は被嫌悪回避との関連が性によって異なる可能性がある。(3) マキャベリアニズムは嫌悪対象人物に対するネガティブ感情の高さに加え、対人的嫌悪尺度のさまざまな対人嫌悪の評定の高さと関連する。一方、自己愛傾向とサイコパシー傾向は、嫌悪対象人物に対するポジティブ感情の高さと関係する。

対人嫌悪傾向尺度の有意な性差が本研究で示されたが、一般成人(高瀬・河野,2023)および看護師(高瀬・河野,2024)を対象とした先行研究においては有意な性差は得られていない。本研究においても効果量は小さい(d 絶対値は0.191)ので、サンプルサイズによっては性差が検出されないものと思われる。被嫌悪回避尺度は、河野・羽成・伊藤(2014)においては本研究と同様に女性の得点が高かったが、河野・羽成・伊藤(2015a)では有意な性差が得られていない。先行研究はいずれも大学生を対象としていたので、回答者の年齢や職の有無にともなう対人葛藤の量といった観点から、今後、性差を確認する必要がある。

性差については、本研究ではダークトライアドの3種とも男性が女性よりも高いという結果が得られた。大学生を被調査者とした下司・小塩(2017)では、SD3-Jによって測定したマキャベリアニズムとサイコパシー傾向において男性が高いことが示されている。同様にギャンブル経験者を対象とした調査(高田,2023)では、男性の自己愛傾向とサイコパシー傾向が女性より有意に高かったが、マキャベリアニズムには有意な性差が見られていない。本研究の結果も、効果量の点でマキャベリアニズムの性差は大きくないので、明瞭な性差が見られたのは自己愛傾向とサイコパシー傾向であったと考えられる。この2特性の性差は、日本人の社会人を主な対象とした調査では比較的信頼性が高いことが示唆される。

嫌悪対象人物に対する感情評定はいずれも性差が見られなかった一方、対人的嫌悪尺度の下位尺度では「自分との相違による嫌悪」と「相手の主張過剰による嫌悪」は女性が高かったが、「自分との類似による嫌悪」は男性が高かった。これに対し、河野・羽成・伊藤(2015a)では性差が見られておらず、斎藤(2003)の結果では「自分との相違による嫌悪」「相手への妬みによる嫌悪」は女性が高く、「相手の傲慢さによる嫌悪」「相手の話し方による嫌悪」は男性が高かった。先行研究は大学生を対象としているので、これらの性差の違いについても年齢や有職者か否かといった点から確認する必要がある。

対人嫌悪傾向尺度と被嫌悪回避尺度の間には男女とも有意な正の相関が認められ、対人嫌悪傾向が高いと逆に嫌われることを避けようとする傾向も高いことが示された。重回帰分析の結果からも示されるように、この2つの心理傾向には一般的な性格特性である神経症傾向が関与していると考えられるので、これらの間に相関が生じる原因には神経症傾向の高さが共通の素因の一部になっていることが推定される。対人嫌悪傾向は男女とも、対人的嫌悪8下位尺度中6尺度と有

意な正の相関が見られ、対人嫌悪傾向が高いと全般的に対象人物の多様な嫌悪的認知が強いことが示された。一方、被嫌悪回避は男性においてすべての対人的嫌悪尺度の下位尺度と有意な正の相関が見られた。男性では、対人嫌悪傾向と同様に被嫌悪回避が高いと対象人物の多様な嫌悪的認知が強いことが示された。女性においては、3下位尺度とのみ有意な正の相関が見られ、男性に比べて嫌悪的認知との関係は限定されていた。これらの違いについては、職業状況の男女差にともなう社会的関係の質や量の違いが影響している可能性があるため、たとえば社会的関係の幅や上下関係といった点から今後検討する必要がある。

単相関の結果から、マキャベリアニズムが高い個人は、他者を嫌う傾向と他者から嫌われることを避ける傾向とがともに高いことが示された。ダークトライアド中のマキャベリアニズムの特徴は、戦略性・計画性が高いことであり (Jones, 2016)、他者に対する取り入り (ingratiation) や、評判作り (reputation building) を対人戦術のひとつとして示すことが指摘されている (Rauthmann & Will, 2011; Jones & Paulhus, 2011)。ここで示された、一般的な対人嫌悪および特定他者に対する嫌悪が高いと同時に自分は嫌われることを避けようとする傾向を備えていることは、マキャベリアンの戦略性が対人感情に反映されているものと考えられる。

これに対し、自己愛傾向およびサイコパシー傾向は、対人嫌悪傾向と被嫌悪回避との相関係数が小さく、かつ、男女で部分的に異なっていた。自己愛傾向の場合、男女とも対人嫌悪傾向尺度と負の相関、男性のみ被嫌悪回避尺度と正の相関が見られた。サイコパシー傾向は、男性では被嫌悪回避尺度とのみ正の相関が示された一方、女性では逆に、対人嫌悪傾向尺度とのみ有意な正の相関が示された。このような相関の性差については、どの程度安定しているかを含めて、今後の検討が必要であろう。

嫌悪対象人物に対する感情については、全体的に、マキャベリアニズムは嫌悪対象人物に対する高いネガティブ感情と関連していることが示された。これは、マキャベリアニズムが対人嫌悪傾向尺度で測られる一般的な嫌悪傾向の高さと相関があったことと一貫した結果であり、マキャベリアニズムの強い個人は、感情的な側面でも嫌悪的な他者に対するネガティブ感情が強く生じる傾向を示していると考えられる。

これに対して、自己愛傾向とサイコパシー傾向はポジティブ感情と関連していることが示された。その理由は本研究の範囲では明らかでないが、これらの2特性と、対人的嫌悪感尺度の「自分との類似による嫌悪」との相関がマキャベリアニズムよりも有意に高く、「相手への妬みによる嫌悪」も部分的に高い傾向が見られることから、嫌悪対象者として自分と同等以上の評価を受けている人物を選びやすく、かつ、悪性妬みをいだきやすい (稲垣, 2019) ことを反映している可能性がある。

ここで試行した男女込みの重回帰モデルにおいては、対人嫌悪傾向と被嫌悪回避との関係がダークトライアド3種間でそれぞれ異なっていた。すなわち、マキャベリアニズムの高さは、対

人嫌悪傾向の高さと被嫌悪回避の高さと関係していた。自己愛傾向は対人嫌悪傾向を低め、被嫌悪回避を高めた。サイコパシー傾向は自己愛傾向とは逆であり、対人嫌悪傾向を高め被嫌悪回避を低めるように作用した。この結果は、従来指摘されてきたダークトライアドの人格像から次のように整合的に解釈できる可能性がある。すなわち、マキャベリアンは、他者に対する取り入りや排除を戦略的に実行するため、他者に対する嫌悪をいだきやすくまた嫌悪感自体も強いが、一方で、自分の立場や評判が悪化することを避けるために被嫌悪回避も高い。自己愛傾向者は、自己への賞賛を求め維持するために他者からの嫌悪を避け、そして、おそらく好意の返報性 (Cialdini, 2008) を前提として、他者からの好意を高めるべく他者に対して好意的になる特性を備える。サイコパシー傾向者は、他者に対する共感性が少なく衝動的なため、他者を嫌悪しやすいが、自己に嫌悪が向けられることにも無頓着である。言い換えれば、対人嫌悪傾向と被嫌悪回避には、マキャベリアニズムの戦略性、自己愛傾向者の自己承認欲求、サイコパシー傾向者の衝動性がそれぞれ反映されていると考えることが可能であろう。

ダークトライアドが、その反社会的な本質を他者に察知される結果、一般的に他者から嫌悪されやすいとすると、マキャベリアンは高い被嫌悪回避によってこれを意図的に避けようとし、自己愛傾向者は他者に対する嫌悪の少なさによって返報的に好意の維持を目指しているとも解釈できるかもしれない。一方、サイコパシー傾向者については、対人嫌悪や被嫌悪回避といった側面において、他者からの嫌悪を回避する方略が不明確である。そのため、サイコパシー傾向者は別の方略を備えているのかもしれない。たとえば、サイコパシー傾向者の一般的な他者への援助傾向の高さ (Mahmut, Cridland & Stevenson, 2016) は、他者からの嫌悪を回避する方略のひとつとして機能しているのかもしれない。

ただしこの重回帰の結果は、特に、単相関の性ごとの特徴を無視して男女込みで分析していることやダークトライアドの3尺度間に一部高い相関が見られること、追加の説明変数として単純にビッグファイブ性格特性のみを採用していること、といった問題点があるので、あくまで、全体像の示唆を得るためのひとつの試みと位置づけられる。

以上のように、本研究によってダークトライアドと対人嫌悪傾向ならびに被嫌悪回避との関係が示され、それぞれの特性を反映した対人嫌悪の様相が示唆された。今後の課題としては、ここで明らかになったダークトライアド特性と対人嫌悪・被嫌悪回避との関係を他の関連変数、たとえば人間関係トラブルの質と量等を加味して確認することが挙げられるだろう。さらに、互恵的な社会関係の維持という観点から、ダークトライアド特性や対人感情の特性が相互にどのように関わりながら利他的な行動を調整しているかを明らかにすることが次の主要な課題となる。

引用文献

- 稲垣勉, 2019. Dark Triad とシャーデンフロイデ：特性妬みとの関連も踏まえて. 鹿児島大学教育学部研究紀要, 70, 133-142.
- 小塩真司, 阿部晋吾, カトロニ ビノ, 2012. 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み. パーソナリティ研究, 21, 40-52.
- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 2014. 他者から嫌われることを避ける傾向の個人差. 東海学園大学研究紀要, 19, 155-165.
- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 2015a. 対人嫌悪の理由と対処の関係：被嫌悪回避を考慮して. 東海学園大学研究紀要, 20, 127-137.
- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 2015b. 恋愛対象者に対する接触回避. パーソナリティ研究, 24, 95-101.
- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 2016. 嫌悪対象者に対する援助傾向：援助を抑制する特徴は何か. 東海学園大学研究紀要, 21, 123-129.
- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 2017. 日本人大学生における対人嫌悪に関する記述統計と性差. 東海学園大学研究紀要, 22, 80-90.
- 斎藤明子, 2003. 対人嫌悪感情に対する社会心理学的研究. 九州大学心理学研究, 4, 187-194.
- 下司忠大, 小塩真司, 2017. 日本語版 Short Dark Triad (SD3-J) の作成. パーソナリティ研究, 26, 12-22.
- 下司忠大, 小塩真司, 2020. Dark Triad と向社会性：向社会的な社会に向けて. 心理学評論, 63, 422-432.
- 高瀬加容子, 河野和明, 2023. 一般的な対人嫌悪傾向を測定する試み. 東海学園大学研究紀要, 28, 31-44.
- 高瀬加容子, 河野和明, 2024. 看護師における対人嫌悪傾向とストレス反応との関連. 東海学園大学研究紀要, 29, 17-25.
- 高田琢弘, 2023. 日本人ギャンブラーにおけるギャンブル障害傾向と Dark Triad の関連. パーソナリティ研究, 32, 82-84.
- 羽成隆司, 河野和明, 伊藤君男, 2022. 青年期男女における両親およびきょうだいに対する接触回避. 椋山女学園大学研究論集, 53, 1-7.
- 日向野智子, 堀毛一也, 小口孝司, 1998. 青年期の対人関係における苦手意識. 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 1, 43-62.
- 日向野智子, 2007. 対人苦手意識が社会的スキルに及ぼす影響：同性の苦手な友人と同性の友人との比較. 日本パーソナリティ心理学会発表論文集, 16, 150-151.
- 日向野智子, 2008. 人を苦手になる. In: 加藤司・谷口弘一編, 対人関係のダークサイド. 北大路書房, 76-88.
- 増井啓太, 浦光博, 2018. 「ダークな」人たちの適応戦略. 心理学評論, 61, 330-343.
- Cialdini, R., 2008. *Influence: 5th edition*. Allyn and Bacon.
- Cleckley, H., 1976. *The mask of sanity*. 5th ed. St. Louis, MO: Mosby.
- Crick, N. R., Grotpeter, J. K., 1995. Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment, *Child Development*, 66, 710-722.
- Fehr E., 2004. Human behaviour: Don't lose your reputation. *Nature*, 432, 449-450.
- Jonason, P. K., LI, Norman P., Webster, G. D., et al., 2009. The dark triad: Facilitating a short-term mating

- strategy in men. *European Journal of Personality*, 23, 5-18.
- Jones, D. N., 2016. The nature of Machiavellianism: Distinct patterns of misbehavior. In V. Zeigler-Hill, & D. K. Marcus (Eds.). *The dark side of personality: Science and Practice in Social, personality, and clinical psychology* (pp.87-107). Washington, DC: American Psychological Association.
- Jones, D. N., Figueredo, A. J., 2013. The core of darkness: Uncovering the heart of the dark triad. *European Journal of Personality*, 27, 521-531.
- Jones, D. N., Paulhus, D. L., 2010. Different provocations trigger aggression in narcissists and psychopaths. *Social Psychological and Personality Science*, 1, 12-18.
- Jones, D.N., Paulhus, D.L., 2011. Differentiating the dark triad within the interpersonal circumplex. In L.M. Horowitz & S. Strack, *Handbook of interpersonal psychology: Theory, research, assessment, and therapeutic interventions*, (pp.249-269). New York: Wiley & Sons.
- Kawano, K., Hanari, T., Ito, K., 2011. Contact avoidance toward people with stigmatized attributes: Mate choice. *Psychological Reports*, 109, 639-648
- Mahmut, M. K., Cridland, L., Stevenson, R. J., 2016. Exploring the relationship between psychopathy and helping behaviors in naturalistic settings: Preliminary findings. *The Journal of General Psychology*, 143, 254-266.
- Paulhus, D. L., Williams, K. M., 2002. The dark triad of personality: Narcissism, Machiavellianism, and psychopathy. *Journal of Research in Personality*, 36, 556-563.
- Rauthmann, J. F., Will, T., 2011. Proposing a multidimensional Machiavellianism conceptualization. *Social Behavior and Personality: An International Journal*, 39, 391-404.
- Trivers, R., 1971. The evolution of reciprocal altruism. *Quarterly Review of Biology*, 46, 35-57.